2023 年度　事業報告

（2023 年 4 月 1 日–2024 年 3 月 31 日）

INSTeM Inter-field Network for Science, Technology and Media Studies

一般財団法人 INSTeM

一般財団法人 INSTeM
2023 年度　事業報告

一般財団法人 INSTeM（Inter-field Network for Science, Technology and Media Studies）は、2023 年度の事業として、INSTeM ウェブサイトでの発信や雑誌『5』の刊行、国際セミナーおよび国際シンポジウム開催、研究活動などを遂行した。

各個別の事業内容は下記のとおりである。

①出版活動

（1）INSTeM ウェブサイト

ウェブサイトは INSTeM の活動の柱のメディアであり、オリジナルエッセイや写真、音声作品、INSTeM が展開するさまざまなプロジェクトの報告などを掲載するプラットフォームである。コンテンツは、INSTeM の関心領域である科学技術社会論とメディア論を軸に、“Science and Technology”、“Media & Communication”、“Arts & Culture”、“Life & Practice”という４つのカテゴリーに属するテーマや内容となっており、身近な科学技術やメディアを見つめる視点を提供するエッセイなどを掲載している。2023 年度は村田麻里子・研究部コーディネーターによる「ライデン通信」（２回）、佐倉統・研究部ディレクターによる「佐倉統のフィールドノート」（３回）、宮田雅子氏による「日常の中のデザイン日記」シリーズ（４回）、溝尻真也氏による「会話型 DST の試み」（４回）、松原徳和氏による「台湾畫友と Google ストリートビューを彷徨う」（３回）を連載した。また、INSTeM の活動報告を適宜更新した。

（2）雑誌『5: Designing Media Ecology』第２期 1 号刊行

2024 年３月９日に、雑誌『5: Designing Media Ecology』第２期１号を刊行した。特集では「Philosophy of In-Between／間（あわい）の思想」をテーマに、編集長を務める水越伸・研究部サブディレクター、編集委員の佐倉統・研究部ディレクターと毛利嘉孝・研究部コーディネーターがエッセイを寄稿。また、伊藤昌亮氏による論考、劉雪雁氏によるインタビュー記事、水嶋一憲氏の連載「機械状資本論ノート――メディア・技術・資本主義」、杉本達應氏の連載「すぎもと組の実践ノート――ハッカビリティを育む」を掲載した。

『5』の冊子版・PDF 版は共に INSTeM Online Shop にて販売しているほか、INSTeM のイベントや学会などで直販を行っている。

（3）ソーシャルメディア

Facebook、X・旧 Twitter (@instem_office)、Instagram (@instem_office)にて、イベント開催やウェブサイトの更新などにあわせ、それぞれの特性を生かした発信をした。どの SNS アカウントも徐々にフォロワー数が増えている。

②イベント

2023 年度は 2024 年 1 月に国際セミナー、2024 年 3 月に国内コンベンションを主催した。また 2023 年 8 月に研究会を共催した。個別の内容は下記のとおりである。

（1）国際セミナー　INSTeM Online Conference “Post-Media Studies in Asia 2024”

日時：　2024 年 1 月 20 日（土）・21 日（日）
開催場所：　オンライン（Zoom）

《概要》

2024 年 1 月 20 日（土）、21 日（日）の 2 日間にわたり、「INSTeM Online Conference “Post-Media Studies in Asia 2024”（アジアにおけるポストメディア研究 2024）」と題された国際会議をオンラインで開催した。基調講演には、香港中文大学のアンソニー・ファン（馮應謙）教授、国立台湾師範大学のエヴァ・ツァイ（蔡如音）教授、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジの玉利智子上級講師を招聘し、INSTeM からは研究部サブディレクターで関西大学教授の水越伸が基調講演者として参加した。また研究部コーディネーターで東京藝術大学教授の毛利嘉孝が総括を担当した。会議は基本的にはオンラインで開催されたが、基調講演者は、東京藝術大学千住キャンパスの配信用の部

屋に集合し、東京から配信、議論に参加した。使用言語は英語とし、公募（Call for Papers）形式による国際会議である。

2023 年 12 月にファン、ツァイ、水越、毛利の 4 人が、インターネットを通じて送られてきた要旨（abstract）と略歴（CV）をもとに審査を行い、審査の結果 15 人（組）の報告者を選出した。報告者たちは、日本のほか、中国、オランダ、アメリカ、タイといった国からオンラインで参加し、テーマに応じて「Post Media Theory and Media Practices （ポストメディア理論とメディア実践）」「Feminist Post-Media（フェミニスト的なポストメディア）」「Culture and Politics in the Digital Sphere （デジタル圏における政治と文化）」「Music and Sound Culture in the Post-Media Age（ポストメディア時代の音楽とサウンド文化）」の 4 つのセッションにわかれ、それぞれ興味深い報告を行った。報告者に加えて当日は 45 名が一般参加者として登録し、常時 40 人前後がオンラインで議論に参加した。

「ポストメディア」とは、もともと 1980 年代の終わりにフランスの哲学者、精神分析者であるフェリックス・ガタリが提起した概念である。インターネットがまだ普及する前の時代にガタリは、フランスで普及しつつあったミニテルを念頭に置きながら、新聞やラジオ、テレビのような一方通行のマスメディアではなく、双方向型のメディアの到来に期待し、それがそれまでになかった新しい政治の様式、民主主義の形式をもたらすと主張した。

それから 40 年近くが経ち、インターネットの発展を実際に経験した私たちは、双方向型の社会的、政治的、文化的な大きな影響とともに、その否定的な側面、問題点やダークサイドも目撃してきた。登場した時にはバラ色の未来を約束するかのように見えたインターネットは、社会や経済の発展に貢献する一方で、同時に多くの問題も引き起こしてきたのである。この国際会議は、80 年代のガタリの議論をあらためて見直すことによって、この 40 年間のメディアの変化を批判的に再検討しようというものだった。

基調講演では、ファン氏はデジタルメディアに対するより批判的な見方（レンズ）の必要性を指摘した上で、フーコーが指摘する「規律＝訓練社会」からドゥルーズが言う「管理社会」へと社会が移行していることを主張した。この「管理社会」では、プラットフォーム資本主義というデジタルメディアのインフラ企業を中心とした新しい資本主義が中心となり、より巧妙な形で私たちの生活が管理、制御されるようになると

いうのである。ファン氏によれば、それに対する批判はより日常的なメディアの実践を通じてなされるべきであるという。

ツァイ氏は、呉明益（ウー・ミンイ）の小説をある種のメディア論のテキストとして読むことを通じて、デジタルメディア研究の問題の拡張を試みた。ツァイ氏は、より大きな自然の生態系やエコロジー、動物や植物、生物や身体の問題として捉え直すことを通じて、現在インフラストラクチャーやプラットフォームが支配しているかのようにみえるメディア環境そのものを別の言語で語る方法、新しいメディア論を提案したのである。

2 つの基調講演は全く異なったアプローチであるが、現在のメディア研究の輪郭とその可能性、そして問題点を提起している。このことは、AI やアルゴリズム、身体など従来のメディア研究では捉えきれなかった新しい領域の存在論を問う玉利氏の議論とも響き合っている。

同様に各報告のテーマも多様だった。ここで全てを要約し、ひとつの傾向を示すことは難しい。けれども、デジタルメディアをめぐる現状とメディア研究に、より批判的な視点を導入することが必要とされているという点で、多くの報告者に一定の合意が見られたことが印象に残った。その上で、デジタルメディア研究が狭義のメディアや技術の研究にとどまることなく、福祉やケア、ジェンダーやセクシュアリティ、政治、社会問題、身体や環境を含めた新たなメディア研究の領域へと広がりつつあることが確認できたことは、一定の成果として評価できるのではないか。新型コロナ禍の時期に急速に広まったオンライン国際会議という研究者のメディア技術のインフラストラクチャーを生かしつつ、こうした共同研究が続けられることを今後も期待したい。（毛利嘉孝）

（2）INSTeM Convention 2024 Spring「大人のためのリテラシー：これからの知恵と技法を考える」

日時：2024 年 3 月 9 日（土）・10 日（日）
場所：東京大学本郷キャンパス・福武ホール

《概要》　2024 年 3 月 9 日（土）、10 日（日）の 2 日間、「INSTeM コンベンション 2024 Spring」を、東京大学本郷キャンパスの福武ホールにおいて開催した。初の本格的な対面イベントとなった今回のテーマは、「大人のためのリテラシー：これからの知恵と技法を考える」。　リテラシーとはもともと文字の読み書き能力、すなわち識字力を意味する。メディア・リテラシーは、現代社会におけるメディアを文字のようなものとしてとらえ、メディアの読み書きをめぐる一連の営みや教育のこと

を指している。スマートフォンやSNS、生成AIなどが急速に普及するなか、デジタル時代のメディア・リテラシーの必要性が叫ばれている。一方で近年は、金融リテラシー、環境リテラシーなどの幅広い領域で、これまでの枠組みに収まりきらない学びや協働活動を指して「リテラシー」という言葉が使われつつある。

子どもには学校などでメディアや環境のリテラシーを学ぶ機会がある。では大人はどうか。高齢化が進む日本社会で、大人がリテラシーを学ぶ場が必要ではないか。その学びのための知恵や技法はどのようなものか。今回は、各地で活動されている方々22 組にお集まりいただき、展示やトーク、ミニワークショップなどを行っていただいた。

第 1 日目。土曜日午前に各地から出展者が集まり、あらかじめ用意された長方形のダンボール板 2 枚を使って、それぞれのブースづくりを進めた。位置取りや文房具の貸し借り、ポスターの貼り付け、POP の作成などを、近隣の出展者同士が協力し合いながらワイワイと進め、まるで大人のための学園祭だという声があがった。午後のオープニングは、INSTeM 理事長であり、研究部ディレクターの佐倉統からのあいさつと INSTeM の概要説明で始まった。続いてサブディレクターの水越伸から INSTeM コンベンションの趣旨とプログラムの紹介があった。そして今回設けられた「科学とデジタル技術」「ビジネスとライフスタイル」「市民社会とデザイン」という 3 つのカテゴリーをとりまとめる松下慶太氏（関西大学）、研究部コーディネーターの鳥海希世子による説明があり、いよいよコンベンションの始まりとなった。

それ以降は各ブースでの活動紹介とトーク、ミニワークショップが福武ホール地下 2 階のあちこちで同時多発的に開催され、その様子は、まるでバザールや縁日のようだった。そうした雰囲気が出展者や参加者にも伝わることでコンベンションは祝祭的で非日常的な場になったといえる。普段とは違う語り手や聞き手が交わり合うなかで、それぞれが違う領域に関心を持ち活動に取り組んでいるにもかかわらず、共通の課題や可能性を抱えていることに気づき、共感し合う人々があげる歓声をあちこちで聞くことができた。午後 5 時過ぎからの懇親パーティでは、あちこちで話の輪ができ、それらが交わっては分かれ、新たな輪ができるということが、和気藹々とした雰囲気のなかで繰り返された。ケータリング業者の方にまでスピーチをしていただくなど、パーティ自体がワークショップデザインとファシリテーションの実践の場となったようで、予定時間を超過して盛り上がった。

第 2 日目。前日の熱気が冷めやらぬ福武ホールでは、午前中からトーク、ミニワークショップ、出展ブースの説明などがあちこちで続行された。この種のイベントでは 2 日目は参加人数が減る傾向があるが、1 日目とほぼ同じ数の参加者があちこちで出展者と話し込む姿が見られた。11 時 45 分から 13 時まで行われたクロージングセッションでは、研究部コーディネーターの宇田川敦史、松下氏と鳥海から、3 つのカテゴリーで括られた 22 組の出展の様子について総括コメントがあり、さらに各出展者が感想やコメント、今後に向けての要望などを語った。それらを受けて、学習経営論の中原淳氏（立教大学）、INSTeM 研究部コーディネーターの山本貴光、吉川浩満、村田麻里子、毛利嘉孝から、寸鉄人を刺すような、しかしユーモラスな総評が語られ、定刻に終了した。

2 日間には出展者と一般参加者あわせて 100 名を超える方々が参加してくださった。出展してくださった方々、参加者のみなさんに、この場を借りてお礼申し上げたい。初の本格的な対面イベントとなった今回のコンベンションを、関係者一同、ドキドキしながら実施したが、出展者や参加者へのアンケートによれば、コンベンションが当初予定した以上に人や活動を結びつけるネクサスとしての役割を果たすことができたようで、おおむね成功裡に終わったといえる。ただし 2024 年 1 月の国際セミナーから 2 ヶ月足らずでの開催だったため、広報に十分な時間を割くことができなかったこと、いくつもの活動が同時並行的に進められたために参加者がじっくり全体を体験できないという開催形式の課題なども明らかになった。これらを踏まえ、コンベンションを定期的に開催していく方策を検討中である。（水越伸）

（3）研究会 “Cross-Border Lecture: The Critical Design in the Context of Post-Phenomenology（「ポスト現象学の文脈におけるクリティカル・デザイン」）”（共催）

日時：2023 年 8 月 4 日（金）
場所：（対面）関西大学千里山キャンパス第 3 学舎 A203 教室
　　（オンライン）Zoom
主催：関西大学社会学部メディア専攻水越研究室
共催：一般財団法人 INSTeM

《概要》

本研究会では、台湾の國立清華大學科技藝術研究所専任教授であり、関西大学客員教授である邱誌勇（Aaron Chiu）氏が「方法論としての批判的デザイン（critical design）」というテーマで講演した。司会を研究部コーディネーターの水越伸が務めた。

邱教授によれば、「批判的デザイン（critical design）」とは、潜在的に隠された意図や価値を明らかにし、代替的なデザイン価値を探求する、デザインによる実践的な戦略である。批判的デザインの実践は、観客の先入観に挑戦し、対象物やその使用方法、周囲の文化についての新しい考え方を誘発する。また、批判的デザインは、急速な技術進歩に対する懸念、大量生産の規模や現代の資本主義に対する批判を表現するために、さまざまな芸術的手段を用いることで、芸術的創造やデザインを通して、これらの現象が人間社会に与える負の影響に疑問を投げかけている、とのことである。本講演ではデザインとアートにポスト現象学的な視点を導入し、現代台湾のアーティストやデザイナーの作品を例に、アート／デザインの存在とテクノロジーの役割の関係が分析された。

③ 教育普及・研究活動

2023 年度は２つの研究活動が進行した。概要は下記のとおりである。

（1）「知識 OS の仕様書」プロジェクト

研究部コーディネーターを務める山本貴光・吉川浩満の両名による同プロジェクトでは、人間の認知や記憶を助ける物理空間がもつ性質を、PC のデスクトップで実現することを目指している。人間の身の丈に合わないほど巨大化した膨大なデータの倉庫となったコンピュータを、自分専用の図書館のような馴染みのある空間として使えるよう知識の環境として仕立て直す「知識 OS」の考案・設計・開発が、その最終目標である。

2023 年度は、この「知識 OS」の考案・設計段階として、要求仕様、すなわち PC を使ったユーザーの知的活動を支援するために必要な要素の検討を進めた。また、「知識 OS」に関する調査として、各種ゲーム類、VR Chat や各種メタヴァースなど 3D を用いたサーヴィスの検討、および関連文献の蒐集と検討などを行なった。

検討内容の概要は以下のとおりである。

・「拡張空間」――デスクトップを馴染みの場所にする：各種のデジタルゲームにおける疑似的な三次元空間の表現を参考に、PC のデスクトップを自分の部屋の一部として拡張するというアイデアを検討。ディスプレイの平面の向こう側に自分の部屋と地続きの空間があるといっ

た感覚であり、この空間に手を加えて増改築してゆくことで「知識 OS」の基礎となる空間を実現する。
・「ルーム」――ファイル、フォルダの上位概念：この拡張空間はいわばデスクトップの疑似立体化であり、例えばユーザーは、仕事や関心ごとに複数の空間をつくって自由に行き来できる。この空間を仮に「ルーム」と呼んでおく。ルームにはオブジェクトを配置でき、基本となるオブジェクトとして、ファイルに該当するもの、フォルダに該当するもの、ルーム構成用のものの３つを想定。ユーザーは自分でルームを造り、必要な資料を置いたり、開きっぱなしにしたり、散らかしたり片付けたりできる。
・「ルームログ」――遡り分岐もできる：PC で調べ物をする際、ブラウザからさまざまなウェブページを訪れ、どんどんとタブが増えていくが、あとになると一体どうやってここに辿り着いたのか、これらのタブを開いているのはなぜかと、軽い記憶喪失のような状態に陥ることがある。そのため、ルームでの行動と変化をログに記録する。いつでもあとから見直せるという点は重要。
・「バックヤード」――不要なルームはアーカイヴ：現状の OS では、フォルダには作業の結果しか残らないため、時間が経つともはやなにがなにやら分からなくなっていることが多い。これを回避するため、用が済んだルームは、それ以上変更が加わらないよう凍結し、バックヤードにしまっておけるようにする。
・「マッピング」――複数のルームを分類・整理：複数のルーム全体を俯瞰したり、個別のルームを見たりするためのインターフェイスを用意。従来の OS のファイル管理とは違い、ヴィジュアル要素を活用して、認識と記憶に資するものにしたい。

「知識 OS」では、人間の認知や記憶を助ける物理空間がもつ性質を、PC のデスクトップで実現することを目指している。そのためには、物理空間で行われていることを参照しつつも、コンピュータの性質を活かした工夫が必要となるだろう。今後はさらに検討を深め、ルームの実験・実装へと進めていく予定である。（山本貴光・吉川博満）

（2）声のメディアプロジェクト――INSTeM ライブ

本プロジェクトでは、音声のみでコミュニケーションをとることによる学び合い、知識の生産と伝承、コミュニティづくりなど、「声のメディア」の可能性を実践的に探っている。2023 年度は、前年度に引き続き「INSTeM ライブ」というオンライン上の声だけによる場作りの実践を重ねた。これは１、２ヶ月に 1 回程度、土曜日の朝 8 時 30 分にチャットアプリ「Messenger ルーム」を使ってヴァーチャルに集い、さまざまなテーマを語り合う、小さな公開ミーティングのような空間である。各回のテーマやゲストは、本プロジェクトのコアメンバーである水越伸（研究部サブディレクター）、神谷説子（研究部エディター）、忠聡太氏

（福岡女学院大学）、溝尻慎也氏（目白大学）が事前に決め、参加者はざっくばらんに話をしたり、耳を傾けて参加するというスタイルをとった。2023 年度は次の 6 回開催した。

①2023 年 4 月 29 日（土）　テーマ：「キーワード集の今」

フィルムアート社から刊行された『クリティカル・ワード ポピュラー音楽』の編者である永冨真梨さん、日高良祐さん、編集者の沼倉康介さんをゲストに迎え、単語ではなく文章単位での検索が可能になりつつある時代に、入門書としてのキーワード集を編むことの難しさや可能性について語り合った。

②2023 年 6 月 3 日（土）　テーマ：「コロナ禍明けの今日このごろ」

2020 年にパンデミックが始まって以降、コロナ禍の日常の声を記録してきた INSTeM 音声メディアチームが、COVID-19 の感染症としての位置付けが 5 類へ移行しコロナ禍が明けて約 1 ヶ月というタイミングのこの回で、それぞれの身のまわりで気づいたことなどを語り合った。

③2023 年 7 月 8 日（土）　テーマ：「メディアとしての学会」

6 月下旬に開催された日本メディア学会や International Association for the Study of Popular Music（IASPM）に参加した INSTeM ライブのメンバーが、メディアにかかわる人々が集まる学会とそのあり方について、ざっくばらんに語り合った。

④2023 年 9 月 30 日（土）　テーマ：「Theory, Culture & Society Summer School 2023」

9 月中旬、オーストリアのクラーゲンフルトで開催された Theory, Culture & Society 誌主催 “Theory, Culture & Society Summer School 2023 Programme”に登壇した研究部サブディレクターの水越伸と同コーディネーターの毛利嘉孝が、この社会・文化理論の最先端を扱い続ける学術誌が初めて開催したサマースクールの持つ意味やそこでのディスカッションについて語り合った。

⑤2023 年 11 月 25 日（土）　テーマ：「『メディア教育宣言』――メディア・リテラシーをアップデートせよ！」

デビッド・バッキンガム著 *The Media Education Manifesto* (Polity Press, 2019)の全訳『メディア教育宣言――デジタル社会をどう生きるか』が世界思想社より発刊され、監訳した研究部サブディレクターの水越伸が、インターネットやデジタルメディアのあり方が変化を続ける中で本書の論旨の持つ意味などについて語った。

⑥2023 年 12 月 16 日（土）　テーマ：「2023 年を振り返る」

2023 年を INSTeM ライブメンバーが振り返った。後をたたない紛争のニュース、不穏な世界情勢、徐々に過去のこととなりつつあるコロナ禍、旧ジャニーズ事務所の性加害問題、坂本龍一の死去、生成 AI の急激な広がりなど、さまざまなことが話題に上った。

INSTeM ライブの参加者はお互いを知っていることが多いが、音声のみでコミュニケーションをとると、相手が話す内容により耳を傾けるだけでなく、対面や Zoom のようなビデオコミュニケーションでは見過ごしがちな声のトーンや息づかい、ちょっとした沈黙や言いよどみにまで耳を澄ましていることに気づく。また、INSTeM ライブは台本がなく、「ライブ」であることを重視しあえて記録をしないため、司会や参加者の話は自由な広がりを持ち、さまざまに膨らんでいく面白さもあった。一方、ここだけで留めておくのはもったいないような大勢に伝えたい内容や、あらためて聴き直したいような話はすべて雲散霧消してしまったため、知識の伝承という点では課題が残った。今後は録音構成として残すことも検討の余地があるであろう。

声のメディア実践は、圧倒的に視覚情報に囲まれている自分たちの日常のメディア環境を批判的に捉え直すきっかけにもなる。2023 年度で得た課題を検討しつつ、引き続き実践を重ねながら、INSTeM のメディアの生態系をデザインしていきたい。（神谷説子）

以上

2023 年度事業報告には、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律施行規則」第 34 条第 3 項に規定する附属明細書「事業報告の内容を補足する重要な事項」が存在しないので作成をしない。